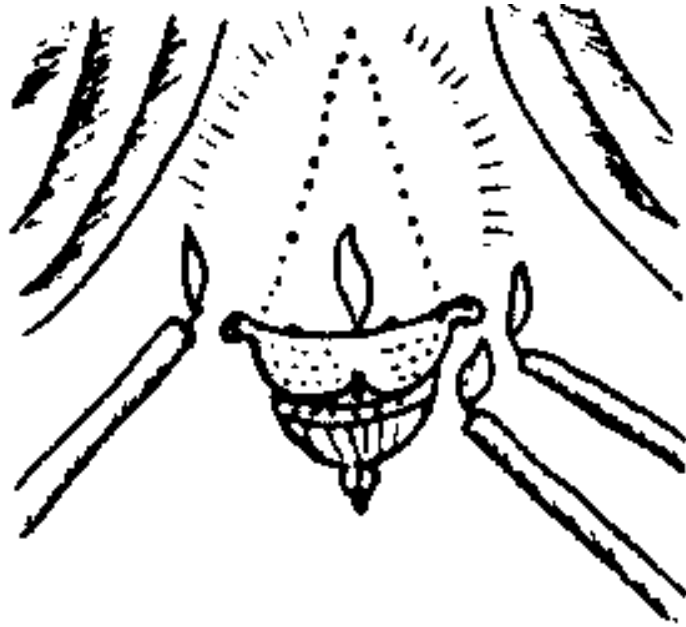


All Night Vigil

主日徹夜祷



通常部分（変わらない枠組み）に
日替わり（固有部分）を挿入して構成する。

主日の日替わり部分は八調経による。
八調の印があるところは別冊を見る。

大阪ハリストス正教会

2021年4月改訂

主日徹夜禱

司祭 (王門の前に立って) 光栄は一体にして生命を施す別れざる聖三者に常に帰す、今も何時も世世に、
誦経 (詠) 「アミン」

<九時課省略>

晩 課 ☆復活祭期は「ハリストス死より復活し」3回

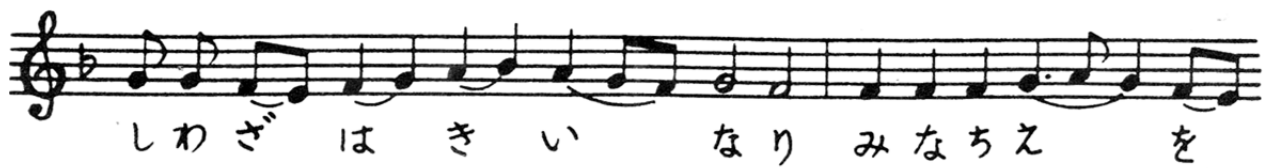
司祭 来れ、我等の王・神に叩拜せん。(歌う場合もある)
来れ、ハリストス我等の王・神に叩拜俯伏せん。
来れ、ハリストス我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。

首唱聖詠 (第 103 聖詠の抜粋を歌う、小祭日では誦読。司祭は王門の前に立ち、光耀祝文を唱える)

わがたま しい や 主をほめ あげよ
主やなんじ はあ がめほめ らる 主わが"かみ
やなんじはいたっておおい なり主やなんじ はあ
がめほめ らる なんじは光 えい とい げんと
をこら む れり主やなんじ はあ がめほ
め らる やまのいただ きに みず"たつ
み ず"たつ 主 やなんじのしわざ" は
き い なり やまのあいた" に み



つながる みずながる 主やなんじの



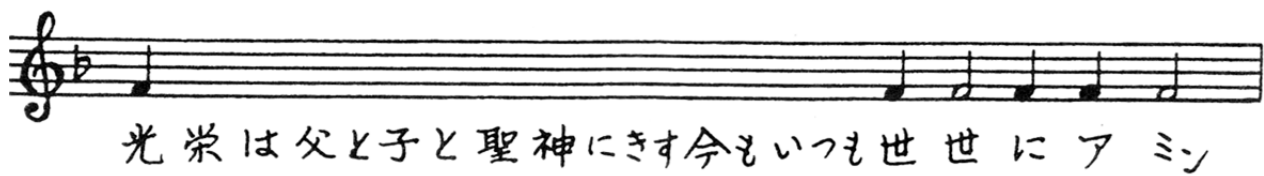
しわざは きい なり みなちえ を



もってつくれりちえをもつてつくれり 光え



いはなんじばんぶつをつくりし主に きす



光栄は父と子と聖神にきす今もいつも世世にアミン

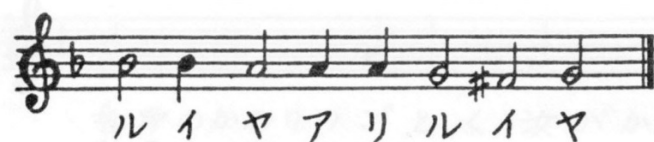
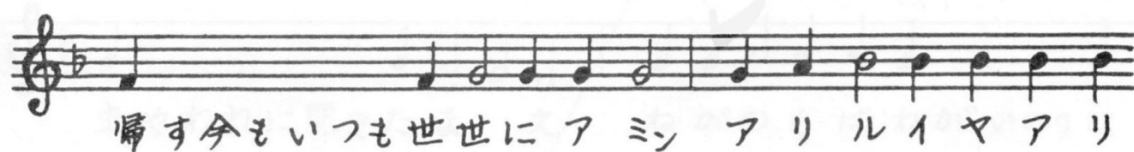
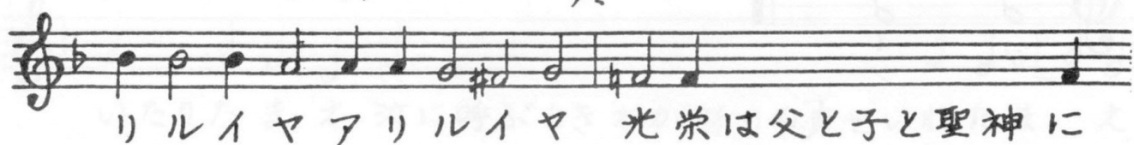
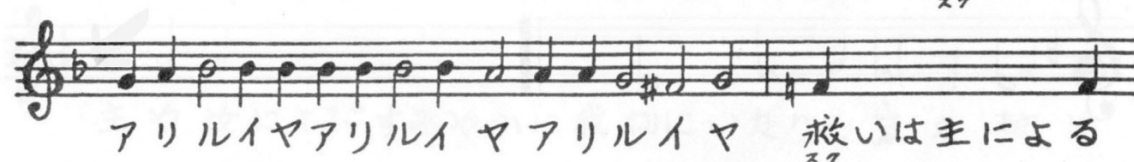
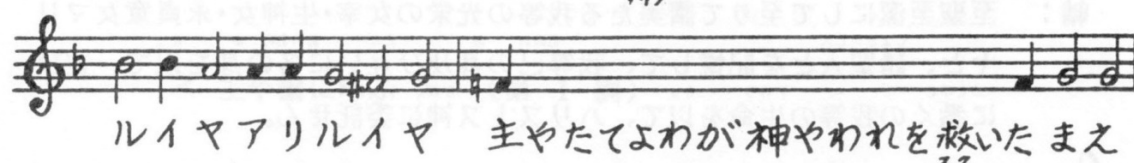
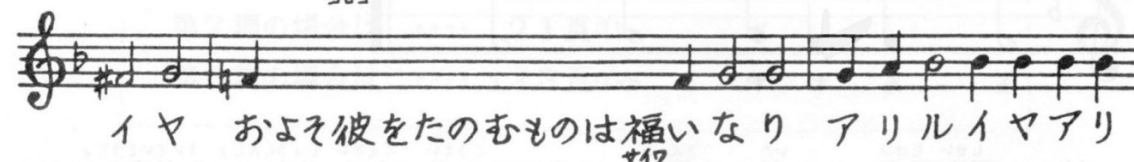
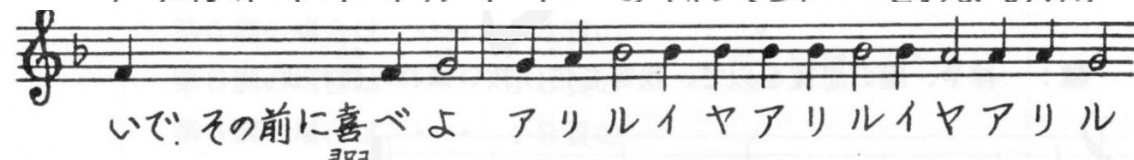
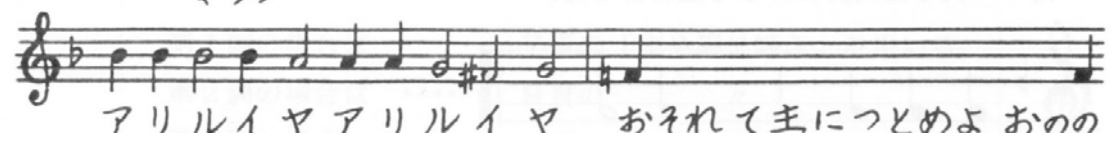
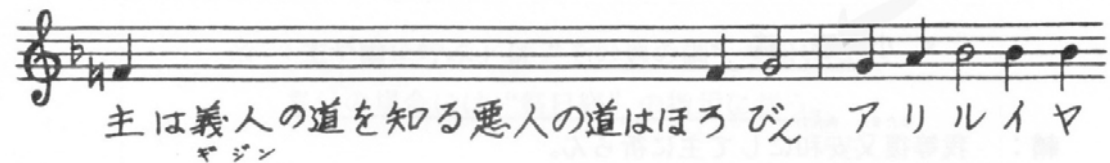
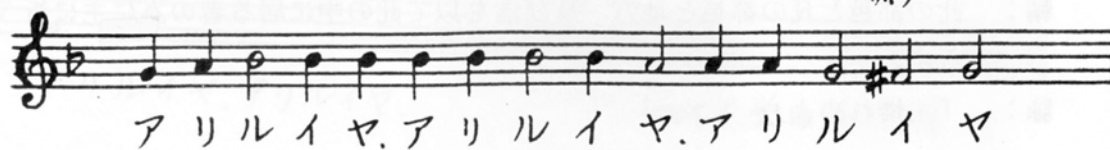
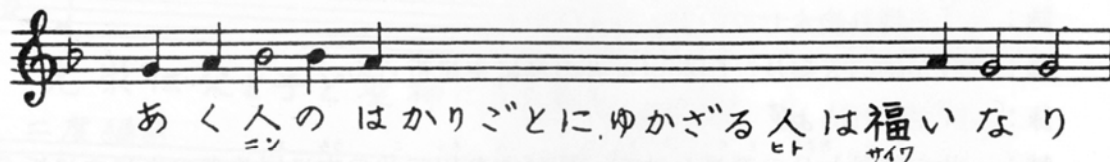
二度繰返



アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ、神や光栄は汝に帰す

大連禱

- 輔祭 我等安和にして主に禱らん、 (詠) 主 憐れめよ
- 輔祭 上より降る安和と我等が靈の救いの為に主に禱らん、 -以下同様-
- 輔祭 全世界の安和神の聖なる諸教会の堅立、及び衆人の合一の為に主に禱らん。
- 輔祭 此の聖堂、及び信と慎みと神を畏る心とを以て此に来る者の為に主に禱らん
- 輔祭 教会を司る我等の主教 (某)、司祭の尊品、ハリストスに因る輔祭職、悉くの教衆、及び衆人の為に主に禱らん、
- 輔祭 我が国の天皇及び国を司る者の為に主に禱らん、
- 輔祭 此の都^{まち}邑と凡の都^{まち}邑と地方、及び信を以て此の中に居る者の為に主に禱らん、
- 輔祭 気候順和、五穀豊饒、天下泰平の為に主に禱らん、
- 輔祭 航海する者、旅行する者、病を患うる者、艱難に遭う者、虜となりし者、及び彼等の救いの為に主に禱らん、
- 輔祭 我等諸の憂愁と忿怒と危難とを免るが為に主に禱らん、
- 輔祭 神や、爾の恩寵を以て、我等を助け救い憐み護れよ、
- 輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光栄の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、
- (詠) 主 爾に
- 司祭 (高声) 蓋凡そ光栄尊貴伏拝は 爾^{なんじ} 父と子と聖神に帰す、今も何時も世世に、 (詠) 「アミン」



小連禱

輔祭 我等安和にして主に禱らん、 (詠) 主 憐れめよ

輔祭 上より降る安和と我等が^{たましい}霊の救いの為に主に禱らん、 (詠) 主 憐れめよ

輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光荣の女宰・生神女^{しょうしんじょ}・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に^{ことごと}悉くの我等の^{いのち}生命を以て、ハリストス神に委託せん、

(詠) 主 爾に

司祭 (高声) 蓋権柄及び国と権能と光荣は爾父と子と聖神に帰す、今も何時も世世に、(詠) 「アミン」

八調

☆別冊へ

【主よ、爾によぶとスティヒラ】第 140、141、129、69 聖詠とスティヒラ

<途中 140 聖詠「願わくは…」以下は通常省略されている>

(指示された調で「主や爾によぶ」を歌い、(聖詠の句に続いて)、スティヒラ 10 個を歌う (唱える)。

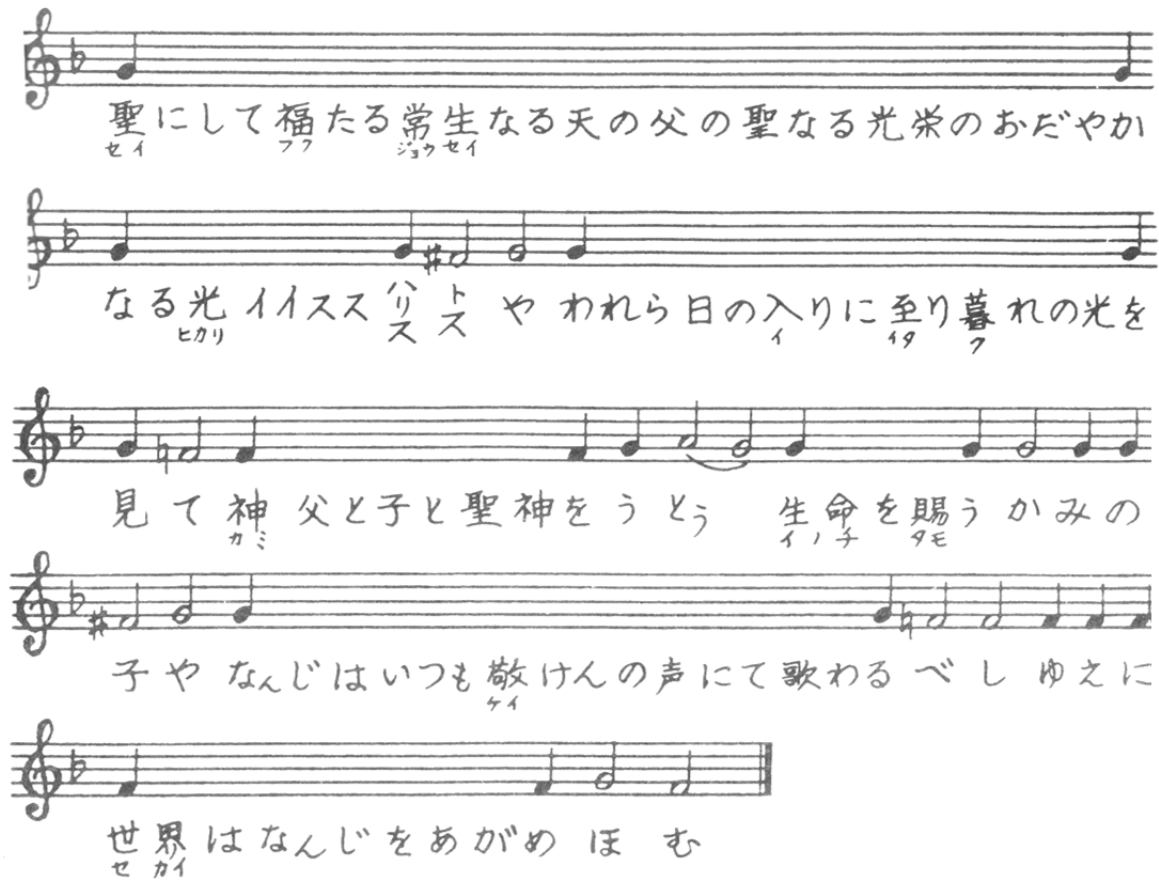
最後に、「光荣は」「今も」に続いて生神女ドグマティカを歌う。王門開く

※日本の教会では一般に、10 句のうち 3 句ほどしか読まれていない。何句唱えるかは司祭の判断だが、目安として、炉儀が終わり、至聖所で聖入の準備が整ってから。

聖入 「聖にして福たる」

輔祭 (高声) 睿智肅みて立て、

選択1 聖にして福たる



聖セイにして福フたる常ジョウ生セイなる天テンの父フの聖セイなる光クワ榮エイのおオだダやヤか
なる光ヒカリ イイススハハリリスス やわれら日ヒの入イりに至シり暮クれの光クワを
見ミて神カミ父フと子コと聖セイ神カミをうウとト 生イノチ命タメを賜タマうかみカミの
子コやなんじはいつも敬クワイけんの声コエにて歌ウタわるべしゆえに
世セ界カイはなんじをあアかカめほむ

選択2 聖にして福たる

Znamenie/Valaam



聖セイにして福フたタる
常ジョウ生セイなる天テンの父フの聖セイなる光クワ榮エイの
おオだダやヤかなるひかりイイススハハリリススや、
われら日ヒの入イりにイたりクれレのひかりを見ミて、

かみ ちち せい しん を う た - う
 神 父 と 子 と 聖 神 を う た - う

い - の ち た ま か み
 生 命 を 賜 う 神 の 子 や、

なん じ は い つ も け い げ ん こ え う た
 なん じ は い つ も 敬 虔 の 声 に て 歌 わ る べ し

ゆ え せ か い なん じ あ が ほ
 故 に 世 界 は 爾 を 崇 め 讃 む

ポロキメン (まっすぐでも構わないが、メロディをつけることもできる。)

輔祭 謹みて聴くべし、
 司祭 (衆に祝福) 衆人に平安、
 輔祭 睿智

- 〔土〕 主は王たり、彼は威厳を衣たり、
 (句) 主は能力を衣、又之を帯にせり、
 (句) 故に世界は堅固にして動かざらん、
 (句) 主や、聖徳は爾の家に属して永遠に至らん、

土 6調

主は 王 たり 彼は 威 厳 を 衣 たり

(句)主は能力を衣、またこれを帯にせり(句)故に世界は堅固にして動かざらん(句)主や、聖徳は爾の家に属して永遠に至らん。

※通常まっすぐで2回半唱えられることが多いが、土曜日は大ポロキメンなので、本来は4回半。

☆祭日と重なる場合はパレミヤ(旧約聖書の読み)がある。

【重連禱】

輔祭 我等皆靈を全うして曰はん、我等の思を全うして曰はん、 (詠) 主憐めよ
輔祭 主全能者、吾が列祖の神や、爾に禱る聆き納れて憐めよ、 (詠) 主憐めよ
輔祭 神や爾の大なる憐に因りて我等を憐めよ、爾に禱る聆き納れて憐めよ (詠) 主憐めよ (3次)
輔祭 我が国の天皇及び国を司るものの為に主に禱らん、
輔祭 又教会を司る我等の主教 () 及びハリストスに於ける悉くの我等の兄弟の為に禱る
輔祭 又恒に記憶せらるる福たるこの聖堂の建立者、及び已に寐りし悉くの父祖兄弟、此の處と諸方とに葬られ
たる正教の者の為に禱る、
輔祭 又我等の兄弟、諸司祭、諸修道司祭、及びハリストスに於ける我等の衆兄弟の為に禱る、
輔祭 又此の至尊なる聖堂に者を獻り、善業を行ひ、之に勞し、之に歌ひ、及び此に立ちて爾の大にして豊なる憐
を仰ぎ望む者の為に禱る、
司祭 蓋爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何も世世に、
(詠) 「アミン」

誦經 主よ、我等を守り、罪なくして此の晩を度らせ給へ。主吾が先祖の神よ、爾は崇め讃められ、爾の
名は尊み歌はる、「アミン」
主よ、爾を待むに因りて、爾の憐を我等に垂れ給へ。主よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠を我に訓
へ給へ。主宰よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠にて我に悟らせ給へ。聖なる者よ、爾は崇め讃めら
る、爾の誠にて我を照らし給へ。
主よ、爾の憐は世世に在り、爾の手の造りし物を棄つる勿れ。讃は爾に帰し、歌は爾に帰し、
光榮は爾父と子と聖神に帰す、今も何時も世世に、「アミン」

【増連禱】

輔祭 我等主の前に吾が晩の禱を増し加へん、 (詠) 主憐めよ
輔祭 神よ、爾の恩寵を以て我等を助け救ひ憐み護れよ、 (詠) 主憐めよ
輔祭 此の日の純全、成聖、平安、無罪ならんことを主に求む、 (詠) 主賜へよ
輔祭 平安の天使、正しき教導師、吾が靈体の守護者を賜はんことを主に求む、
輔祭 我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む、
輔祭 我等の靈に善にして益ある事、及び世界に平安を賜はんことを主に求む、
輔祭 我等の生命の余日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む、
輔祭 我等の生命の終が「ハリストティアニン」に適ひ、疾なく、恥なく、平安なること、及びハリストスの
畏る可き審判に於て宜しき對をなすを賜はんことを求む、
輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、
我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、
(詠) 主爾に
司祭 蓋爾は善にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に獻ず、今も何時も世世に、
(詠) 「アミン」
司祭 衆人に平安、 (詠) 爾の神にも
輔祭 我等の首を主に屈めん、 (詠) 主爾に
司祭 願くは爾父と子と聖神の国の権柄は讚揚讚榮せられん、今も何時も世世に、 (詠) 「アミン」

八調

☆別冊へ

【挿句のスティヒラ】

<司祭等、聖堂に戻る。挿句のスティヒラを誦する。歌ってもよい。挿句（アポスティカ）とはスティヒラのあとに句が読まれるため。平日の句は変わらないが、祭日の句は特別に選ばれている。主日は八調経に句も書かれているのでそのまま読めばよい>

【シメオンの祝文】 誦経 または 歌う

主宰よ、今爾の言に循ひて、爾の僕を釋し、安然として逝かしむ。
蓋我が目は爾の救いを見たり、爾が萬民の前に備へし者なり、
これ異邦人を照らす光、及び爾の民イスライリの栄なり。

シメオンの祝文

キエフのラスペフ

adpt. Maria M.
2004 ver.



しゅさい 主宰よ、いま なんじ 爾のことばに した 従がいて、

なんじ ぼく 爾の僕をゆるし あんぜん 安然としてゆかし—む。

けだし わ 蓋 我が目は なんじ すく 爾の救いを見たり、 なんじが

ばんみん 万民の前に そなえしものなり。 こ いほうじん 是れ 異邦人を照らす

ひかり、 およ 及び なんじ 爾の民イスライリの さかえ 栄なり。

【聖三祝文、至聖三者祝文、天主経】 時課経

誦経 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。(3次)

光荣は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に、「アミン」

至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を潔くせよ、主宰よ、我等の愆を赦せ、聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給へ、悉く爾の名に因る。

憐めよ。(3次)

光荣は父と子と聖神^oに帰す、今も何時も世々に、「アミン」

天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の国は来り、爾の旨は天に行はるるが如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に債ある者を我等免すが如く、我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、猶我等を凶悪より救ひ給へ。

司祭 ^{けだし}蓋 国と権能と光荣は爾父と子と聖神^oに帰す、今も何時も世々に、

(詠) 「アミン」

☆祭日の場合は祭日トロパリ

選択 1 生神童貞女よ、慶べよ



生神童てい女やよろこべよ 思ぢやうに満たさるる
シヨウ シン ドウ ジョウ オシチヤウ ミミ

マリヤや主は汝とともにす 汝は女の中にてさんび
マリヤ オシト ヲトメ ノ ナカニテ サンビ

た り 汝のはらの果も賛美たり 汝は我等のたましい
タリ オシト ノ ハラノ ミミ サンビ タリ オシト ノ タマシイ

を 救うの主を生めはなり
ヲ スクウ ノ オシト オシメハナリ

選択 2 生神童貞女よ、慶べよ

4調 ギリシアチャント



生神童貞女やよろこべよ
シヨウ シン ドウ ジョウ オシチヤウ ミミ

恩寵に満たさるる マリアよ 主はなんじとともにす
オンジュウニ ミミサスル マリア オシト ナンジトトモニス

なんじは 女のうちにて 讚美たり
ナンジハ オシト ノ ウチニテ サンビ タリ

なんじの はらの 果も 讚美たり
ナンジノ ハラノ ミミ サンビ タリ

なんじは われ 我等の たましいをすくう 主を
ナンジハ ワレ オシト ノ タマシイヲ スクウ オシトヲ

生み たらば なり
オシメタラバ ナリ

(詠) 願くは主の名は崇め讃められ、今より世世に至らん、(3次) (まっすぐに歌う)

司祭 願くは主の降福は、其恩寵と仁愛とに因りて常に爾等に在らん、今も何時も世世に、(詠)「アミン」

早課へ ※晩課のみで終了する場合は、主日のトロパリを歌い、37 ページ下の「睿智」へ

早 課

時課程 (※聖堂中央で読む)

誦経 至高きには光榮神に歸し、地には平安降り、人には恵臨めり。三次

主よ、我が唇を啓け、然せば我が口は爾の讚美を揚げんとす。二次

★復活祭期は「ハリストス死より復活し」3回に変わる

第3聖詠

主よ、我が敵は何ぞ多き、多くの者は我を攻む、多くの者は、我が靈を指して彼は神より救を得ずと云ふ、然れども主よ、爾は我を衛る盾なり、我の榮なり。爾は我が首を擧ぐ、我が聲を以て主に呼ぶに、主は其の聖山より、我に聴き給う。我臥し、寝ね、又覺む、主は我を扞ぎ衛ればなり。環りて我を攻むるの萬民は我之を懼るるなし。主よ起きよ、吾が神よ、我を救ひ給え。爾は我が諸敵の頰を批ち、悪人の齒を折けり。救は主に依る、爾の降福は爾の民に在り。

我臥し、寝ね、又覺む、主は我を扞ぎ衛ればなり。

第37聖詠

主よ、爾の憤を以て我を責むる母れ、爾の怒を以て我を罰する母れ、蓋爾の矢は我に刺さり、爾の手は重く我に加わる。爾の怒に依りて我が肉に傷まざる所なく、我の罪に因りて我が骨は安きを得ず、蓋我が不法は我が首に溢れ、重任の如く我を壓す、我の無智に依り我が傷腐れて且臭し。我屈まりて仆れんとし、終日憂ひて行く、蓋我が腰は熱に悩まされ、我が肉に傷まざる所なし。我力衰えて痛く憊れ、我が心の裂くるによりて號ぶ。主よ、我が悉くの願は爾の前に在り、我が歎息は爾に隠るるなし。我が心は戦ひ栗き、我が力は我より脱け、我が目の光も已に我にあるなし。我が朋と親しき者とは我が傷を見て離れ、我が親戚は遠ざかりて立つ。我が生命を覓むる者は網を設け、我を害わんと欲する者は我が淪亡のことを言ひて、毎日悪しき謀を圖む、然れども我は聾の如く聴かず、啞の如く己の口を啓かず、是に於て我は聞かなく、其口に答ふる所なき人の如くなれり、蓋主よ、我爾を恃む、主我が神よ、爾聴き給はん。我言えり、願はくは敵は我に勝たざらん、我が足の跌く時、彼等は我に向ひて誇り高ぶる。我殆ど仆れんとす、我の憂は常に我が前に在り。我は我が不法を認め、我が罪の爲に甚哀しむ。我が敵は生きて愈強く、故なくして我を疾む者は益多し、悪を以て我の善に報ゆる者は、我が善に従ふに因りて我の敵となれり。主我が神よ、我を遣つる母れ、我に遠ざかる母れ、主私の救主よ、速に來たりて我を救ひ給へ。

第62聖詠

神よ、爾は私の神なり。我暁より爾に尋ぬ、我が靈は渴きて爾を望み、我が身は空しくして燥ける水なき地にありて、痛く爾を慕ふ、爾の能力と爾の光榮とを見ん爲なり、我が嘗て爾を聖所に觀しが如し、蓋爾の愛憐は生命に愈る。我が口爾を讚美せん。是くの如く我生ける時爾を崇め讚め、爾の名に依りて我が手を擧げん。我が靈の飽かざること脂油を以てするが如く、

我が口 歡くちよろこび の聲こえにて爾なんじを讚美さんびす、榻とこにて爾なんじを記憶きおくし、夜更やこうに爾なんじを思ふおも時に在ときり。蓋あ爾けだしなんじは我われの
 扶助たすけなり、爾なんじが翼つばさの蔭かげに於おいて我われ欣よろこばん、我が靈たましいは親したしく爾なんじに附つき、爾なんじの右みぎの手は我われを扶たすく。
 彼かの我が靈たましいを害そこなはんことを謀はかる者は地ちの深ふかき處ところに降くだらん、彼等かれら刃やいばにかかかりて、狐きつねの獲物えものとなら
 ん。惟王ただおうは神かみの爲ために樂たのしまん、凡およそ彼かれを以もつて誓ちかふ者は譽ほまれを得えん、蓋あ 謊けだしいつわりを言いう者の口くちは塞ふさがれん
 とす。

夜更やこうに爾なんじを思ふおも、蓋あ爾けだしなんじは我われの扶助たすけなり、爾なんじが翼つばさの蔭かげに於おいて我われ欣よろこばん、我が靈たましいは親したしく爾なんじ
 附つき、爾なんじの右みぎの手は我われを扶たすく。

光榮こうえいは父ちちと子こと聖神せいしんに歸きす、今いまも何時いつも世世よよに、「アミン」。

「ア ril イヤ」「ア ril イヤ」「ア ril イヤ」、神かみよ、光榮こうえいは爾なんじに歸きす。三次

<●第 87、102、142 聖詠省略>

【大聯禱】

輔祭 我等安和にして主に禱らん、 (詠) 主 憐めよ
 輔祭 上より降る安和と我等が靈たましいの救すくいの爲に主に禱らん、
 輔祭 全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の爲に主に禱らん、
 輔祭 此の聖堂、及び信つしと慎しみと神を畏るる心とを以て此こに來る者の爲に主に禱らん、
 輔祭 教會を司る我等の(府)主教()、司祭の尊品、ハリストスに因る輔祭職、悉ことごとくの
 教衆、及び衆人の爲に主に禱らん、
 輔祭 我が國の天皇、及び國を司る者の爲に主に禱らん。
 輔祭 此の都邑まちと凡およの都邑まちと地方の爲、及び信を以て此この中に居る者の爲に主に禱らん、
 輔祭 氣候順和、五穀豊穰、天下泰平の爲に主に禱らん、
 輔祭 航海する者、旅行する者、病うれを患かんふる者、艱難かんなんに遭あふ者、虜とりことなりし者、及び彼等すくいの救の爲に
 主に禱らん、
 輔祭 我等もろもろ諸の憂愁うれいと忿怒いかりと危難あやうきとを免るるが爲に主に禱らん
 輔祭 神よ、爾の恩寵を以て、我等をたすけ救ひ憐み護れよ、
 輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶し
 て、我等己の身及び互おのおのに各ならびの身を以て、並ことごとに悉いくの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、
 (詠) 主爾に
 司祭 蓋けだし凡そ光榮尊貴伏拜は爾父と子と聖神せいしんに歸いつす、今も何時も世世に、 (詠) 「アミン」

<●カフィズマ、セダレン省略>

<h1>八調</h1> <p>☆別冊へ</p>	<p>【主は神なりとその週の調の復活トロパリ】</p> <p><主は神なりをトロパリの調で歌い、続いて復活トロパリを歌う。></p>
-------------------------	--

<【主は神なり】※日本では、19世紀ロシアの習慣で、通常3回続けて歌うが、名古屋では本来の規則に従って、下記の句に続いて4回。第4句「工師が捨てし・・・」に続いてトロパリ。>

主は神なり我等を照せり、主の名に依りて来る者は崇め讃めらる、

【ポリエレイ】(聖入、王門が開き、灯りが付き、堂役に先導されて司祭が福音書を捧出)

選択 1

ポリエレイ (ステパノフ?)

主の名をほめあげよ 主のよほくやほめあげよ

ア リルイヤーア リルイヤーア リルイヤー

イエルサリムにましますの主は シオンにあがめほめらる

ア リルイヤーア リルイヤーア リルイヤー

主をととみほめよ アリルイヤーア リルイヤー

かれは仁慈にしてそのあわれみは世世にあれば

なりアリルイヤー 天のかみをととみほめよ

アリルイヤーア リルイヤーそのあわれみは世

世にあれば なりアリルイヤー

大齋準備週間

蕩子、断肉、断酪の主日のみ

136 聖詠

「バビロンの川辺にて」をポリエレイに続いて歌う

われ-ら かつて バビロンの かわべに 座-し
シオンを おもいて 泣けり
ア- - リル - - イヤ
かのうちにおいて わがことを やなぎに かけたり
ア- - リル イヤ
かし-こには われらを とりこにせしもの われら-に
うたの ことばを もとめ われらをせむるもの
われら-に たのしみを もとめていえり
我がために シオンの うたをうたえ-よ
ア- - リル イヤ
わ れら 異邦-の 地において いか-んぞ
主の うたを うた- - わん
ア- - リル イヤ

復活のエフロギタリア 5調 <祭日は讃歌>

(附唱) 主よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠めを我に訓へ給へ。

救世主よ、^{かみのつかい}天 使¹の軍は、爾が死者のうちに入れど、死の力を滅ぼし、アダムを己と共に起こし、^{もろびと}衆人を地獄より救い給いしを見て驚けり。

主や汝はあがめほめらる 汝の誠^{イマシメ}を我れに教えたまえ

きう世主や神^{カミ}の使^{ツカ}の軍^{グン} は汝が死者の内に入れど

死の力を^{チカラ} 滅ぼし アダムをおのれと共に起こし もろびと

を地獄^{ジゴク}よりすくいたまいしを見ておどろけり

<以下同様に歌う>

(附唱) 主よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠めを我に訓へ給へ。

墓のうち^{かみのつかい}に光る天 使は、携香女に謂へり、女弟子よ、何ぞ香料を悲しみの涙に交ふる、墓を見て悟れよ、救世主は墓より復活せり。

(附唱) 主よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠めを我に訓へ給へ。

携香女は朝早く泣きて、爾の墓に往きしに、^{かみのつかい}天 使その前に立ちて云へり、泣くときは過ぎたり、涙を止めて、使徒に復活を告ぐべし。

(附唱) 主よ、爾は崇め讃めらる、爾の誠めを我に訓へ給へ。

救世主よ、携香女は香料を携え、爾の墓に來たりて泣きしに、^{かみのつかい}天 使之に謂へり、何ぞ生ける者を死者のうち^{かみのつかい}にありと思ふ、彼は神として、墓より復活せり、

光栄は父と子と聖神に歸す

父と子と聖神、一体の聖三者を拝みて、セラフィムとともに呼ばん、聖、聖、聖なるかな主や。

今もいつも世世に「アミン」。

(生神女讃詞) 童貞女よ、爾は^{いのち}生命を賜う主を生みて、アダムを罪より救い、エヴァに悲しみに易へて喜びを賜へり、爾より身を取りし神人は、生命を落としし者を率いて、また復活に向かわせたり、

ア ril イヤ、ア ril イヤ、ア ril イヤ、神よ光栄は爾に歸す (3回)

1 『連接歌集』では「てんし」

小連禱

輔祭 我等安和にして主に禱らん、 (詠) 主 憐れめよ
輔祭 上より降る安和と我等が^{たましい}靈の救いの為に主に禱らん、 (詠) 主 憐れめよ
輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光荣の女宰・生神女^{しょうしんじょ}・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、
我等己の身及び互に各の身を以て、并に^{ことごと}悉くの我等の生命^{いのち}を以て、ハリストス神に委託せん、
(詠) 主 爾に
司祭 (高声) 蓋父と子と聖神の名は讚揚せられ、爾の国は讚揚せらる、今も何時も世世に、
(詠) 「アミン」

八調

☆別冊へ

【アンティフォン／品第詞／ステペンナ】の第一を読む 八調経
<第2以下省略>
【ポロキメン】<まっすぐ歌うあるいは唱えても可>

※ アンティフォン（品第詞）は第1から第3まであり、それぞれに詩が二つずつあり「光荣は」「今も」で結ばれる。日本では第1のみを読む。そのとき「つなぎ」となる「光荣は…今も…」は中央に入れる。

※

福音の読み

輔祭 主に禱らん、
(詠) 主、憐れめよ
司祭 蓋我が神や、爾は聖にして聖なる者の中に居る、我等光荣を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世に、
(詠) 「アミン」
凡そ呼吸ある者は主を^ほ讚め揚げよ、(2回半)
(句) 神を其聖所に讚め揚げよ、彼を其有力の穹蒼に讚め揚げよ、
輔祭 我等に聖福音経を聴くを賜うを主・神に禱らん、
(詠) 主憐れめよ、3次
輔祭 睿智肅みて立て、聖福音経を聴くべし、
司祭 衆人に平安、
(詠) 爾の神にも、
輔祭 (某) 伝の聖福音経の読み、**11の復活福音から**
(詠) 主や、光荣は爾に帰す、光荣は爾に帰す、
輔祭 謹みて聴くべし、

第一の主日の福音経、マトフェイ百十六端。

彼の時十一の門徒ガリレヤに往きて、イイススの彼等に命ぜし山に至り、彼を見て拝せり、然れども猶疑へる者ありき。イイスス就きて、彼等に語げて曰へり、天に二在り地に在る一切の権は我に與へられたり、故に爾等往きて、萬民に教を傳へて、彼等に父と子と聖神^oとの名に因りて洗を授け、彼等を教へて、我が一切爾等に命ぜしことを守らしめよ、視よ、我恒に爾等と偕にして世の終末まで在るなり、「アミン」。

第二の主日の福音経、マルコ七十端。

彼の時安息日過ぎて、マリヤ「マグダリナ」、イアコフの母マリヤ、及びサロミヤ、香料を買ひたり、往きてイイススに鬻らん為なり。七日の首の日甚早く、墓に来る、日の出づる頃なり、相語りて曰へり、誰が我等の為に石を墓の門より移さん。目を挙げて、石の已に移されたるを見る、蓋其石は甚大なり。彼等墓に入りて、白衣を衣たる少者が右の方に坐せるを見て駭けり。彼は之に謂ふ、駭く勿れ、爾等は十字架に釘せられしナザレトのイイススを尋ぬ、彼は復活して、此に在らず、觀よ、此は彼を置きし處なり。往きて、其門徒及びペトルに語げて言へ、彼は爾等に先だちてガリレヤに往く、爾等彼處に於て彼を見ん、其爾等に言ひしが如しと。婦急ぎ出で、墓より奔り、戦き且つ驚きて、一言も人に語げざりき、懼れしが故なり。

第三の主日の福音経、マルコ七十一端。16:9-20

彼の時七日の首の日朝早く、イイスス復活して先づマリヤ「マグダリナ」、即其曾て七の魔鬼を逐ひ出し、所の者に現れたり。婦往きて、先に彼と偕に在りし哀み哭ける者に告げたれども、彼等其生きて、之に見られたりと聞きて、信ぜざりき。其後彼等の中の二人が村に往く時、イイスス変りたる容を以て之に途に現れたり。二人返りて、餘の者に告げしに、彼等をも信ぜざりき。卒に十一門徒に其席坐の間に現れて、其信なきと心の頑なるとを責めたり、彼の復活したるを見し者を信ぜざりし故なり。又彼等に謂へり、全世界に往きて、福音を悉くの受造物に傳へよ、信じて洗を受くる者は救はれ、信ぜざる者は罪に定められん。信ずる者には斯の休徴は従はん、我が名に因りて魔鬼を逐ひ出し、新なる方言を言ひ、蛇を操り、毒を飲むとも、彼等を害せざらん、手を病者に按せば、愈ゆるを得ん。主は彼等に語りし後天に升起、神の右に坐せり。彼等は出で、四方に教を傳へ、主は彼等を相け、之に従ふ休徴を以て其言を固めたり、「アミン」。

第四の主日の福音経、ルカ百十二端。24:1-12

彼の時7日の首の日、朝甚早く、婦等は日備へたる香料を攜へて、墓に来り、他の婦も彼等と偕にせり。石の墓より移されたるを見、入りて、主イイススの屍を見ざりき。之が為に惑へる時、視よ、輝ける衣を衣たる二人彼等の前に立てり。彼等懼れて、面を地に伏せれば、二人之に謂へり、何ぞ生ける者を死者の中に尋ぬる。彼は此に在らず、乃復活せり、彼が尚ガリレヤに在りし時、如何に爾等に語げて、人の子が罪人の手に付され、十字架に釘せられ、第三日に復活すべきことを云ひしを憶へ。彼等其言を憶ひ起し、墓より帰りて、悉く此を十一門徒及び其餘の者に告げたり。使徒に之を告げたる者は、「マグダリナ」マリヤ、イオアンナ、イアコフの母マリヤ、及び其他彼等と偕に在りし者なり。使徒は彼等の言を空言と為して、之を信ぜざりき。然れどもペトル起ちて、墓に趨り往き、俯して、惟裏布の置けるを見、其成りし事を心に異みて帰れり。

第五の主日の福音経、ルカ百十三端。

彼の時ペトル起ちて、墓に趨り行き、俯して、惟裏布の置けるを見、其成りし事を心に異みて帰れり。是の日其中の二人、イエルサリムを去ること約六十小里なるエムマウスと名づくる村に行きしが、互に凡そ此等の有りし事を語れり。語り且論ずる時、イイスス親ら近づきて、彼等と偕に行けり。然れども二人の目は止められて、彼を識らざるを致せり。彼曰へり、爾等は行きて何事をか互に論じ、又何ぞ憂ふる色ある。其一人クレヲパと名づくる者、彼に對へて曰へり、イエルサリムに來りし名の中、爾獨近日其中に成りし事を知らざるか。問ひて曰へり、何の事ぞ。彼等曰へり、イイススナゾレイ、即神及び衆民の前に行と言とに能力ある預言者たりし者に在りし事、如何に我等の司祭諸長及び有司等が彼を解して、死に定め、十字架に釘せし事なり。我等は嘗て此の人はイズライリを贖ふべき者なりと望めり、然れども此れ皆成りしより今已に第三日なり。然るに又我等の中の或婦等は我等を驚かせり、彼等朝早く墓に在りしが、其屍を見ずして、來りて、天使等の現れて、彼は生くと言ふを見しことを語げたり。我等の中の教人墓に適きしに、果して婦の言ひし如き事を見たり、惟彼を見ざりき。イイスス彼等に謂へり、噫無知にして、凡そ諸預言者の言ひし事を信ずるに心の遅き者よ、ハリストスは此くの如く苦を受けて、其光榮に入るべかりしに非ずや。是に於てモイセイより始めて、諸預言者に及ぶまで、凡そ聖書に彼を指して載することを彼等に説き明せり。往く所の村に近づきしに、彼は尚遠く行かんとする者の若し。二人彼を留めて曰へり、我等と偕に止れ、蓋時暮れんとし、日已に戻り彼入りて、偕に止れり。席坐せる時、彼餅を取りて、祝福し、擘きて彼等に與へたり。其時二人目啓けて、彼を識れり、而して彼忽見えざりき。彼等互に言へり、途中彼が我等と語り、且我等に聖書を解き明しし時、我等の心我が衷に燃えしに非ずや。即時に起ちて、イエルサリムに帰り、十一門徒及び之と偕に聚れる者に遇へり。僉言ふ、主は實に復活せり、而してシモンに現れたり。二人も亦途中に在りし事、及び如何に其餅を擘く時彼等に識られし事を述べたり。

第六の主日の福音經ルカ百十四端。24:36-53

彼の時イイスス死より復活し、其門徒の中に立ちて曰へり、爾等に平安。彼等驚き且懼れて見る所は神なりと意へり。イイスス彼等に謂へり、何ぞ懼れ惑ふ、胡為れぞ此の意は爾等の心に起れる。我が手我が足を視よ。是我自なり、我に捫りて視よ、蓋神には骨肉なし、其我に有るを見るが如し。此を言ひて、手足を彼等に示せり。彼等喜に因りて、猶未だ信せず、且異める時、彼曰へり、此に食ふべき物あるか。彼等は炙りたる魚一片と蜜房とを彼に與へたれば、取りて、彼等の前に食へり。又彼等に謂へり、我猶爾等と偕に在りし時、爾等に語りて、モイセイの律法、諸預言者及び聖詠に、我を指して録されし事、皆應ふべしと云ひしは、乃是なり。其時彼等の智識を啓きて、聖書を悟らしめたり。又彼等に謂へり、斯く録されたり、而して斯くハリストスは苦を受け、第三日に死より復活すべかりき、且其名に因りて、悔改し諸罪の赦とは、イエルサリムより始めて、民に傳へらるべきなり。爾等は此等の事の證者なり。視よ、我は我が父の許約せし者を爾等に遣さん、爾等イエルサリムの城に居りて、上より能力を衣するに迄れ。イイスス彼等を外に率ゐて、ウィファニヤに至り、手を挙げて彼等に祝福せり。祝福する時、彼等を離れ、挙げられて、天に升れり。彼等之を拝し、大に喜びて、イエルサリムに帰り、恒に殿に在りて、神を頌美祝讚せり、「アミン」。

第七の主日の福音經イオアン六十三端。20:1-10

彼の時七日の首の日、朝尚昧きにマリヤ「マグダリナ」墓に來りて、石の墓より移されたるを見る。故に趨りて、シモンペトル及びイイススの愛せし他の門徒に來りて、彼等に謂ふ、人主を墓より取れり、我等其何處に彼を置きしを知らず。ペトル及び他の門徒出で、墓に往けり。二人共に趨りしが、他の門徒はペトルより疾く趨りて、先に墓に來れり。俯して、布の置けるを見たれども、入らざりき。シモンペトル彼に次ぎて來り、墓に入りて、布の置けるを見、又其首を裹みし巾の、布

と共に在らず、乃捲きて、別に他の處に置けるを見たり。其時先に墓に來りし他の門徒も入りて見、而して信ぜり。蓋彼等は未だ其死より復活すべき事の、聖書に載せたるを知らざりき。是に於て二の門徒復已の所に歸れり。

第八の主日の福音經イオアン六十四端。20:11-18

彼の時マリヤは墓の外に立ちて哭けり。哭く時基に俯して、二の天使が、白衣にしてイイススの屍の置かれし處に、一は首に一は足に坐せるを見る。彼等之に謂ふ、婦よ、何ぞ哭ける。彼曰く、人我が主を取れり、我其何處に彼を置きしを知らず。此を言ひて、顧みて、イイススの立てるを見る、然れども其イイススなるを知らざりき。イスス彼に謂ふ、婦よ、何ぞ哭ける、誰を尋ぬるか。婦は園丁なりと意ひて、之に謂ふ、君よ、若し爾彼を移しゝならば、何處に置きしを我に告げよ、我彼を取らん。イイスス之に謂ふ、マリヤよ、婦顧みて彼に謂ふ、「ラウウワニ」、訳すれば夫子なり。イイスス之に謂ふ、我に捫る勿れ、蓋我未だ我が父に升らざりき、乃往きて、我が兄弟に告げて曰へ、我は我が父及び爾等の父、我が神及び爾等の神に升ると。マリヤ「マグダリナ」往きて門徒に己が主を見しこと、及び其彼に之を言ひしことを告げたり。

第九の主日の福音經イオアン六十五端。

彼の時即七日の首の日、既に暮れて、門徒の集れる處の門、イウデヤ人を懼るゝに因りて、閉ぢたるに、イイスス來りて、中に立ちて、彼等に謂ふ、爾等に平安。此を言ひて、彼等に己の手足及び脅を示せり。門徒主を見て喜べり。イイスス復彼等に謂へり、爾等に平安、父が我を遣しゝ如く、我も亦爾等を遣す。此を言ひて、気を嘘きて、彼等に謂ふ、聖神を受けよ。爾等人に其罪を積さば、則積さる、人に其罪を留めば、則留めらる。イイススの來りし時、十二の一なるフォマ、稱してディディムと云ふ者、彼等と偕に在らざりき。他の門徒彼に謂へり、我等主を見たり。然れども彼は之に謂へり、我若し其手に釘の迹を見ず、我が指を釘の迹に入れず、我が手を其脅に入れずば、信ぜざらん。八日を越えて、門徒復内に在り、フォマも彼等と偕にせり。門閉ぢたるに、イイスス來りて、彼等の中に立ちて曰へり、爾等に平安。次ぎてフォマに謂ふ、爾の指を此に押べて、我が手を視よ、爾の手を伸べて、我か脅に入れよ、信ぜざる勿れ、乃信ぜよ。フォマ答へて彼に謂へり、我が主よ、我が神よ。イイスス彼に謂ふ、爾は我を見しに縁りて信ぜり、見ずして信ずる者は福なり。イイススは其門徒の前に於て、亦他の多くの奇蹟、此の書に載せざる者を行へり。此を載せたるは、爾等がイイススは神の子、ハリストスなりと信じ、且信じて、其名に因りて生命を得ん為なり。

第十の主日の福音經イオアン六十六端。

彼の時イイスス其門徒にティウェリアダの海濱に現れたり。其現れたること左の如し。シモンペトル、フォマ、稱してディディムと云ふ者、ガリレヤのカナのナファナイル、ゼワエデイの二子、及び他の二人の門徒共に在り。シモンペトル彼等に謂ふ、我往きて漁せん。彼等曰ふ、我等も爾と偕に往かん。出でゝ、直に舟に登りしが、是の夜は獲る所なかりき。既に明けて、イイスス岸に立てり、然るに門徒は其イイススたるを知らざりき。イイスス彼等に謂ふ、小子よ、爾等に食ふべき物あるか。彼等答へて曰へり、無し。彼は之に謂へり、網を舟の右に施せ、然らば得ん。彼等施しゝに、之を挙ぐる能はざりき、魚の多き故なり。時にイイススの愛せし所の門徒ペトルに謂ふ、是れ主なり。シモンペトル是れ主なりと聞きて、裸なりしに因りて衣を束ねて、海に投ぜり。他の門徒は舟に乗り、魚の盈てる網を曳きて至れり、蓋地を離るゝこと遠からず、約二百尺なり。地上りし時、燃えたる火其上に置きたる魚及び餅あるを見る。イイスス彼等に謂ふ、今爾等が獲たる魚数尾を攜へ來れ。シモンペトル往きて、網を地に曳き上げたり、中に大なる魚一百五十三尾盈て

り、斯く多しと雖、網は裂げざりき。イイスス彼等に謂ふ、来りて食せよ。門徒一も、爾は誰たると、問ふことを敢てせざりき、其主たるを知ればなり。イイスス前みて、餅を取りて、彼等に與ふ、魚も亦然り。イイススが死より復活して後其門徒に現れしこと、此れ其三なり。

第十一の主日の福音經イオアン六七端。21:15-25

彼の時イイスス死より復活して後其門徒に現はれて、イイススシモンペトルに謂ふ、イオナの子シモンよ、爾我を愛すること彼等に過ぎたるか。彼曰ふ、主よ、然り、爾は我が爾を愛するを知る。イイスス彼に謂ふ、我が羔を牧せよ。又第二次彼に謂ふ、イオナの子シモンよ、爾我を愛するか。ペトル曰ふ、主よ、然り、爾は我が爾を愛するを知る。イイスス彼に謂ふ、我が羊を牧せよ。第三次彼に謂ふ、イオナの子シモンよ、爾我を愛するか。ペトル第三次に、爾我を愛するかと、謂ひしに因りて、憂ひて、彼に謂へり、主よ、爾は知らざる所なし、爾は我が爾を愛するを知る。イイスス彼に謂ふ、我が羊を牧せよ。我誠に誠に爾に語ぐ、爾少き時に於て、自ら帯を束ねて、欲する所に行けり、老ゆるに及びて、爾の手を伸べん、他人爾を束ねて、爾が欲せざる所に曳かん。此を言ひしは、ペトルが若何なる死を以て、神を榮せんとするを示せるなり。言ひ竟りて、又彼に謂ふ、我に従へ。ペトル顧みて、イイススの愛せし所の門徒の後に従ふを見る、即晚餐の時、イイススの胸に倚りて、主よ、爾を賣る者は誰ぞと、云ひし者なり。ペトル彼を見て、イイススに謂ふ、主よ斯の人は如何に。イイスス彼に謂ふ、我若し彼が存して、我が来るを待つことを欲せば、爾と何ぞ與らん、爾我に従へ。是に於て此の言は兄弟の間に散じて、此の門徒は死せざらんと言へり。然れどもイイススは彼に、死せざらんと言ひしに非ず、乃我若し彼が存して、我が来るを待つことを欲せば、爾と何ぞ與からんと、言ひしなり。此等の事を證し、且之を書し者は、即此の門徒なり、我等は彼の證の眞なるを知る。イイススの行ひし事、他に亦多く有り、若し一之を書さば、我意ふ、其書は世載するに勝へざらん、「アミン」。

**(詠) 主や、光榮は爾に帰す、光榮は爾に帰す、
【第 50 聖詠】 <省略>**

Handwritten musical score for Psalm 50 in G major. The score consists of four staves of music with Japanese lyrics written below the notes. The lyrics are:

1. ハ リ ト ス の フ ク カ ツ を ミ テ シ ン ナ ル シ ノ イ イ ス ト ド ク リ シ ノ ミ ナ キ モ ノ ヲ

2. オ ガ ム ベ シ ハ リ ト ス ヤ ワ ガ ラ シ ノ ト ウ ノ シ ノ カ ズ ラ ミ

3. メ ノ シ ン ナ ル フ ク キ ヲ ウ タ イ ホ ム メ ノ ハ ワ ガ ラ シ ノ カ ミ ナ レ バ

4. ナ リ メ ノ ソ ノ ト ウ ノ カ ミ ヲ シ ラ ズ タ ダ メ ノ ナ ヲ ト ノ

信者やみな来たりて 十字架にてよろこびは全世界にのぞめり 我等つねに主を
 ほめあげてその復活をあがめうた ね主は十字架に
 釘うたるるをしのびて死をもって死を亡ぼせしによる

大齋準備週、大齋中の主日は「光栄は」以下が変わる。
 祭日は祈祷書を参照のこと

光栄いはちちとことせいしに帰す あわれみ
 ぶかき主や聖使徒の祈禱によつて我等の多くの罪を
 きよめたま えいまもいつも世世に
 アミン あわれみぶかき主や至聖なる生神女の祈禱
 によつて我等の多くの罪をきよめたま え

アミン あわれみふかき主や 至聖なる生神女の祈禱
 によつて我等の多くの罪をきよめたまへ
 神や汝の大いなるあわれみによつてわれをあわれみ
 なんじがめぐみの大ききによつてわれの不法を消し
 たまへ あらかじめ言いがごとく イイススはかより
 ふくかつしてわれらに永きいのちと大いなる
 あわれみをたまへり

大齋準備週間と大齋中の主日

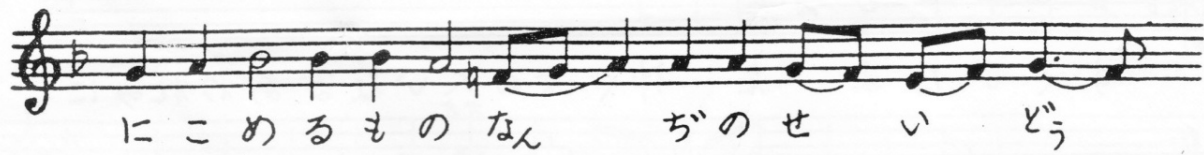
税吏とファリセイから大齋第5の主日まで

「光栄は」以下が変わる


光 栄はちちと子とせいしんに帰す
 いのちをたもとの主やわれにまか
 しの門をひらけよけたし わがた



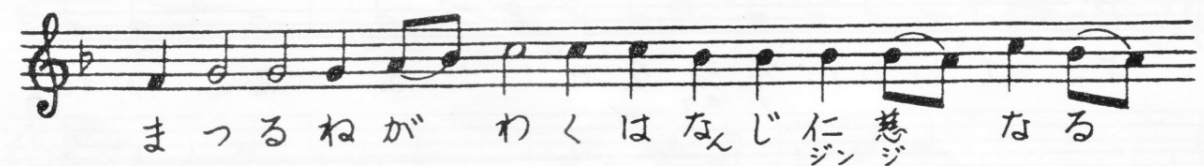
ましいまた く けがれしからだの 堂



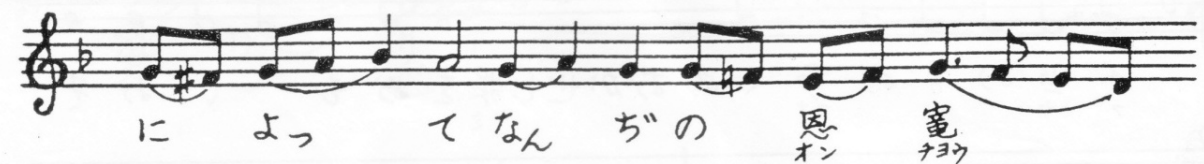
にこめるものなん ぢのせ い どう



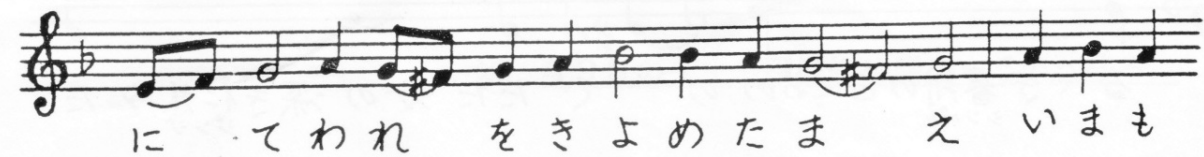
に む かつてあ さ の き どうをたて



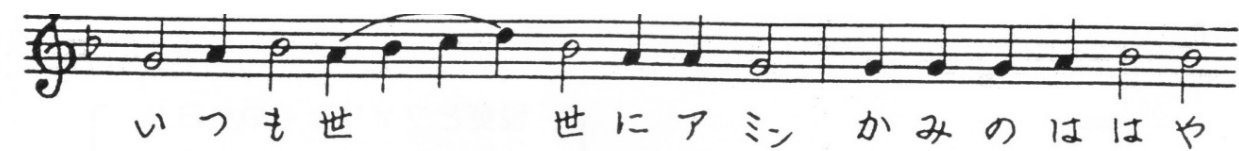
まつるねが わくはなんじ 仁慈 なる



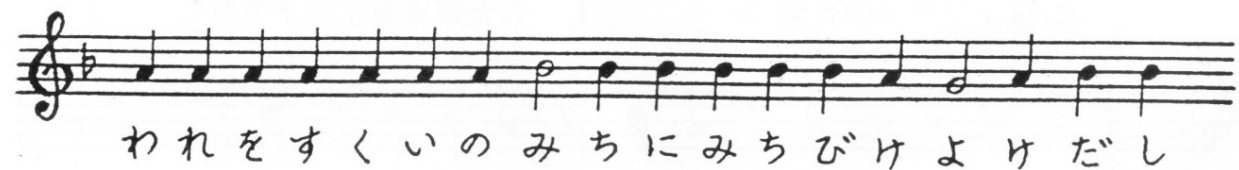
に よっ てなん ぢの 恩 寵



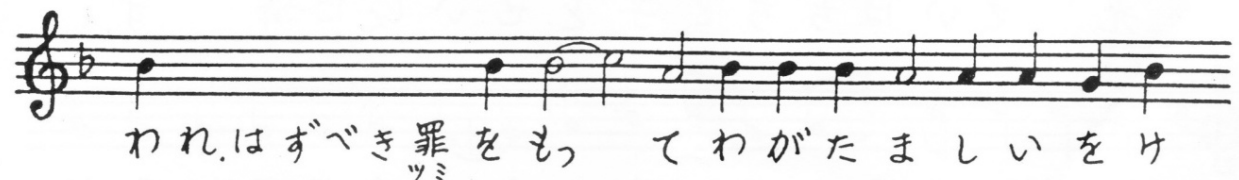
に てわれ をきよめたま え いまも



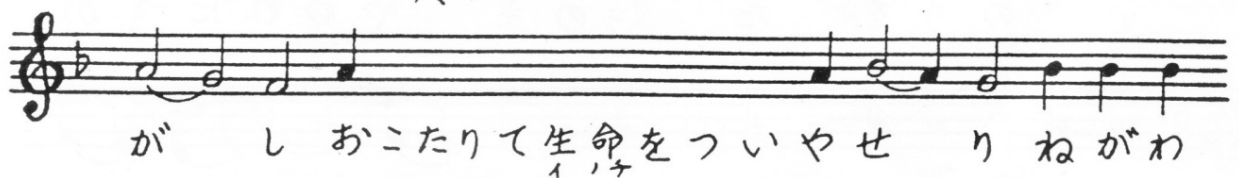
いつも世 世にアミン かみのははや



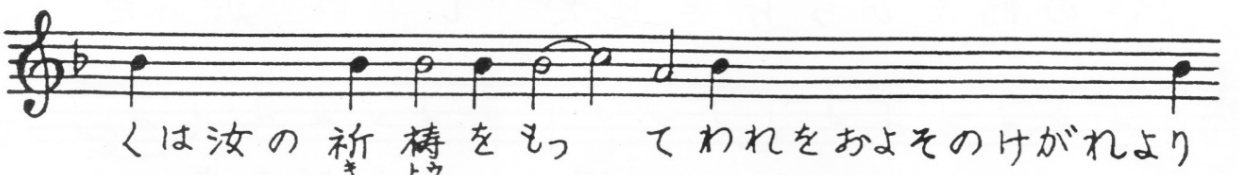
われをすくいのみちにみちびけよけだし



われはずべき罪をもつ てわがたましいをけ



が し おこたりて生命をついやせ りねがわ



くは汝の祈禱をもつ てわれをおよそのけがれより

すくいたま え 神や汝の大いなるあわれみに
 よってわれをあわれ み汝がめぐみのおおきに
 よってわれの不法をけしたま え われ
 不当のもの多くのおかせし罪をおも いおそ
 るべき審判の日におの の ぐただ汝の深き仁慈をた
 のみダウイドの如く汝に呼ぶ神や汝の大いなる
 あわれみによってわれをあわれみたま え

輔祭 神や、爾の民を救ひ、及び爾の嗣業に福を降し給へ、慈悲と洪恩とを以て爾の世界に臨み、正教の「ハリストティアニン」等の角を高うし、我等に爾の豊なる憐を垂れ給へ、至浄なる我等の女宰・生神女。永貞童女マリアの祈りと、生命を施す尊き十字架の力と、無形なる尊き天軍、光荣なる尊き預言者・前驅・授洗イオアン、光荣にして讚美たる聖使徒、我等の聖神父・世界の大教師・成聖者・大ワシリイ、神学者グリゴリイ、金ロイオアン、我等の聖神父ミラリキヤの大主教・奇蹟者ニコライ、我等の聖神父全ロシアの奇蹟者ペトル、アレキシイ、イオナ、フィリップ、我等の聖神父イルクーツクの主教・奇蹟者インノケンティ、光荣なる凱旋の聖致命者、克肖捧神なる我が諸神父、聖にして義なる神の祖父母イオアキムおよびアンナ、聖某(本堂の聖人)及び悉くの聖人の轉達に因りて、大仁慈の主や、爾に求む、我等罪人爾に禱る者に聆き納れて、我等を憐めよ、

(詠) 主憐めよ、12次

(高声) 爾が独生子の仁慈と慈悲と仁愛とに因りてなり、爾は彼と至聖至善にして生命を施す爾の神と偕に讚揚せらる、今も何時も世世に、

(詠) アミン

カノン

カノンは7世紀にパレスティナの聖サワ修道院で発達した9つの歌頌（預言の歌、オーデ）を含む複合形式の聖歌で、早課に挿入されて行われるようになった。8つの旧約歌頌と生神女の歌があり、旧約時代の預言がハリストスによって、どのように成就したかを歌う。各歌頌には3つから4つのトロパリがあり、そのうち最初のトロパリをイルモスという。イルモスは「つなぎ」の意味で、各歌頌のつなぎの意味と、旧約と新約のつなぎの両方の意味を持つ

カノンのイルモス 簡単バージョン

イルモスは難しく歌えないという声が多いので、簡単なメロディの繰り返しにした。

正教の伝統では、カノンなど八調に従う聖歌は簡単なメロディの繰り返しのせて歌うが、日本ではスラブ語の楽譜から翻案したために難しくなってしまった。難しい調は正教会の伝統に立ち帰り、簡単なメロディの繰り返しの還元した。

八調

☆別冊へ

【規程カノン】

「ヘルビムより尊く」は12大祭は歌わず、特別の附唱「我が霊や…」などを歌う。
主日や平日、斎、中小の祭日、は歌う。

- 第1 歌頌、モイセイ（モーゼ）の歌 出エジプト 15:1～9
（第2 歌頌は大斎以外は歌われない）
- 第3 歌頌、アンナ（ハンナ）の祈り 列王記 I[サミュエル I] 2:1～10
【小連禱】（●セダレンまたはコンダク省略）
- 第4 歌頌、アワクムの祈り アワクムの預言書（ハバクク）3:1～19
- 第5 歌頌、イサイヤの祈り イサイヤの預言書（イザヤ）26:9～20
- 第6 歌頌、イオナの祈り イオナの預言書（ヨナ）2:3～10
【小連禱】 コンダク（●イコス省略）
- 第7 歌頌、三人の少者の祈り ダニールの預言書（ダニエル）3:36～56
- 第8 歌頌、三人の少者の祈り ダニールの預言書（ダニエル）3:57～88
「ヘルビムより尊く」
- 第9 歌頌 生神女の歌 ルカ 1:46～55
【小連禱】

主日の附唱は

「主や、光栄は爾の聖なる復活に帰す」

最後のトロパリには

「光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン」

ただし第8 歌頌は「光栄は・・・」が

「父と子と聖神の一なる神を讃め揚げん、今も何時も世々にアミン」

祭日は附唱が異なる。

第9 歌頌のあと

【小連禱】

- 輔祭 我等安和にして主に禱らん、 (詠) 主 憐れめよ
- 輔祭 上より降る安和と我等が^{たましい}霊の救いの為に主に禱らん、 (詠) 主 憐れめよ
- 輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光栄の女宰・^{しょうしんじょ}生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、
我等己の身及び互に各の身を以て、并に^{ことごと}悉くの我等の^{いのち}生命を以て、ハリストス神に委託せん、
(詠) 主 爾に
- 司祭 (高声) 蓋天の衆軍爾を讃揚す、我等も光栄は爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世々に、
(詠) 「アミン」

主日の場合は

「主我等の神は聖なり」 を歌う。3回

(句) 主はシオンにおいて大いなり。

(句) 主は高く衆民の上にあります。

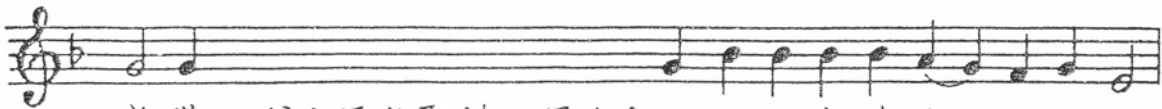
<●【差遣詞 (エクサポスティラリ)】 省略>

八調

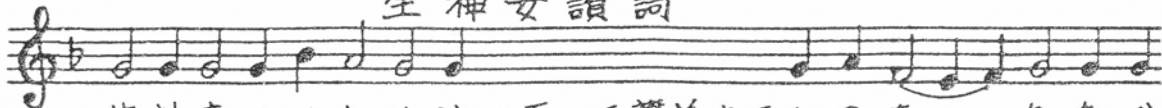
☆別冊へ

【凡そ呼吸ある者とスティヒラ】（讃揚歌、高揚歌）

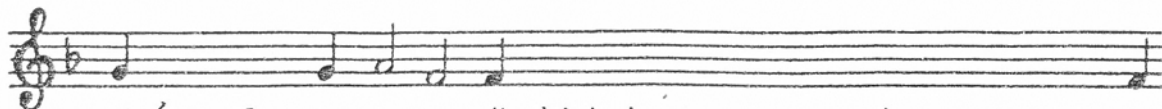
<大祭では「凡そ呼吸ある者」を歌って、148, 149, 150 聖詠を唱え、末尾にスティヒラを挿入するが、日本では省略されて、最後の生神女讃詞のみを歌っている。中小の祭日では「天より主を讃め揚げよ」から誦読し、スティヒラ>



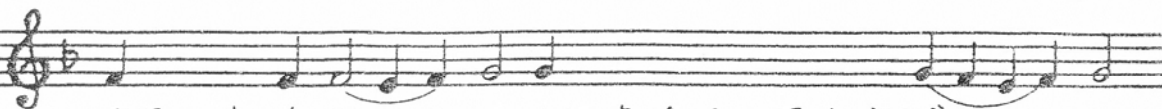
光榮は父と子と聖神に帰す今も いつも世世 にアミン
生神女讃詞



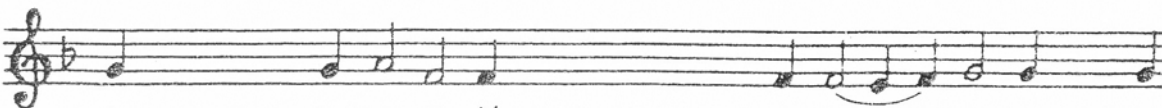
生神童てい女や汝は至って讚美たるものなりなんじ
シヤシンドウ イ サンビ



に身を取りし主は地獄をとりこにしアダムを呼び起し
オコ



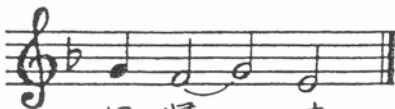
のろいをやぶ りエワをゆるし死を亡ぼし
ホロ



われらをいかせり故にわれら歌うてよ ぶかく行い
ユエ ムト オナ



給いしリス神はあがめほめらる光えいはなんじ
タマ ス カミ



に帰す

選択 1 大頌栄

司祭 光栄は爾我等に光を顕せる主に帰す

至イと高タカきには光栄神カミに帰し 地には平安くだり

人に恵メみはのぞめり 主天の王 神父全能者カミ タク ペンノウ シヤや

主独生シュ ドウセイの子 イスリストス およびせい神シンや 汝の大いなる

光栄によって われら汝をあがめ 汝をほめ あげナんじを

伏フし拝オガみ 汝を尊トウとみ 歌い ぬんじに感謝す 主かみや

神の小羊父コヒツジの子 世の罪をにないしものや我等をあわ

れみたまえ 世のもろもろの罪を荷ニいしものやわれらの

祈りをいれたまえ 父の右に坐カするものやわれらを

あわれみたまえ 汝は独ヒトり せいなり 汝は独ヒトり主

イイス^イス^ス分^分ト^トス^ス 神父の光栄をあらわすものなればなり

ア^ア ミ^ミン^ン われ^れ 日^ヒ 日^ヒ に^ニ 汝^ニ を^ヲ ほめ^ム あげ^ル 汝^ニ の^ノ 名^ヲ を^ヲ 世^ニ 世^ニ に

あ^あ が^が め^め う^う た^た わ^わ 主^ニ や^ニ わ^を れ^ヲ を^ヲ ま^も り^リ 罪^ヲ な^ら く^く し^し て^テ こ^の の^の 日^ヲ を

わ^わ た^た ら^ら せ^せ た^た ま^ま え^え 主^ニ わ^が 先^{セン} 祖^ソ の^の か^か み^み や^や 汝^は あ^あ が^が め

ほ^ほ め^め ら^ら れ^れ 汝^の の^の 名^は は^は 世^々 に^ニ と^と う^う と^と み^み 歌^ウ わ^わ る^る ア^ア ミ^ミン^ン 主^主 や^や 汝^汝

を^を た^た の^の む^む に^ニ よ^よ っ^っ て^て 汝^の の^の あ^あ わ^わ れ^れ み^み を^を 我^レ 等^ラ に^ニ た^た れ^れ た^た ま^ま え

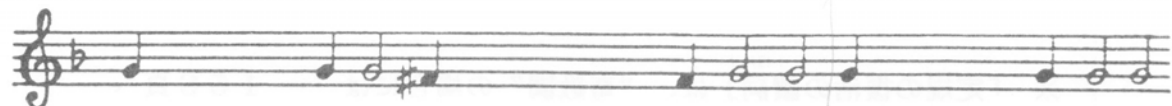
主^主 や^や 汝^汝 は^は あ^あ が^が め^め ほ^ほ め^め ら^ら る^る 汝^の の^の 戒^イ め^メ を^を わ^わ れ^れ に^ニ 教^イ え^エ た^た ま^ま え

主^主 や^や 汝^汝 は^は 世^々 わ^わ れ^れ ら^ら の^の か^か く^く れ^れ が^が た^た り^り わ^わ れ^れ か^か つ^つ て^て い^い え^え り


主^主 や^や わ^わ れ^れ を^を あ^あ わ^わ れ^れ み^み わ^わ が^が た^た ま^ま い^い を^を 医^イ や^や し^し た^た ま^ま え^え わ^わ れ

罪^ヲ を^を 汝^ニ に^ニ 得^ウ れ^レ ば^ハ な^ら り^り 主^主 や^や 汝^汝 に^ニ 走^ハ り^リ つ^つ く^く 汝^の の^の 旨^ム を^を 行^ク


な^な う^う を^を わ^わ れ^れ に^ニ 教^オ え^エ た^た ま^ま え^え 汝^汝 は^は わ^わ れ^れ の^の か^か み^み い^い の^の ち



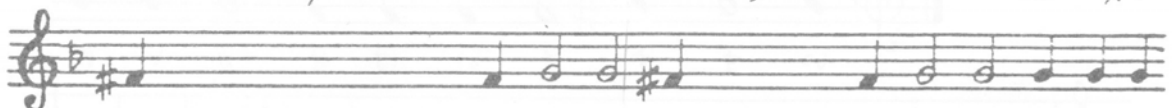
主や汝は世々 われらのかくれがたり われかつていえり



主やわれをあわれみわがたましいを医_イやしたまえわれ



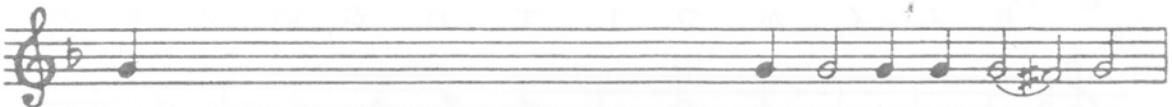
罪を汝に得_ウればなり 主や汝に走_{ハシ}りつく 汝の旨_{ムネ}を行_{ユク}



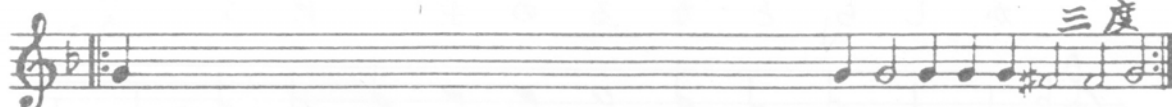
なうをわれに教_{オシ}えたまえ 汝はわれのかみいのち



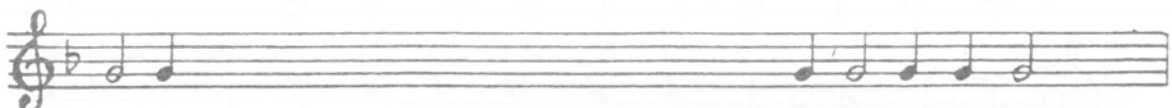
の源_{ミナモト}は汝にあればなり 汝の光_{ヒカリ}において光_{ヒカリ}をみん



あわれみを汝を知るものにつねにたれたまえ



聖なる神 聖なる勇氣 聖なる常生のものや我等をあわれめよ 三度



光榮は父と子と聖神に歸す今もいつも世世にアミン



聖なる常生のものやわれらをお_{なかく}われめよ せいなるか



みせいなる勇氣せいなる常生のものやわれらをおわれめよ

八調

【定規のトロパリ】

奇数 (1. 3. 5. 7) 調の時と偶数 (2. 4. 6. 8) 調の時で異なる

1. 3. 5. 7 調



いま すくいは 世 かいに およべり。



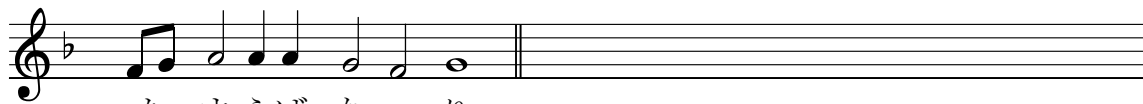
我等 は 墓 かりより 復 活 かつせし わがいのちの



かしらとなる 主に うたう、その死にて死を ほろぼし



我等に 勝 利 と 大いなる 慈 憐 とを



たまえば なーり。

2. 4. 6. 8 調



主よ、なんじは はかより ふくかつして、



地ごくの 鎖を やぶり、死の 定罪を滅ぼし、



衆人を てきの あみより すーくえり。



ひとり大慈憐なるものよ、なんじは使徒にあらわれて、



かれらを 伝教につか わし かれによって、



なんじの 平安を 世かいに たまえり。

【重連禱】

輔祭 神や、爾の大なる憐に因りて我等を憐めよ。爾に禱る、聆き納れて憐めよ、

(詠) 主憐めよ、(3次)

輔祭 又我が国の天皇及び国を司る者の為に禱る、

輔祭 又教会を司る我等の主教(某)、及びハリストスに於ける悉くの我等の兄弟の為に禱る、

輔祭 又ハリストスを愛する悉くの皇軍の為に禱る、

輔祭 又恒に記憶せらる福たる此の聖堂の建立者、及び已に寝りし悉くの父祖兄弟、此の處と諸方とに葬られたる正教の者の為に禱る、

輔祭 又神の諸僕此の聖堂の兄弟に、慈憐・生命・平安・壮健・救贖・眷顧・寛宥及び諸罪の赦を賜はんが為に禱る、

輔祭 又此の至尊なる聖堂に物を献り、善業を行ひ、之に勞し、之に歌ひ、及び此に立ちて爾の大にして豊なる憐を仰ぎ望む者の為に禱る、

司祭 (高声) 蓋爾は慈憐にして人を愛する神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世々に、

(詠) 「アミン」

【増連禱】

輔祭 我等主の前に吾が朝の禱を増し加へん、 (詠) 主憐めよ

輔祭 神や、爾の恩寵を以て、我等を助け救ひ憐み護れよ、 (詠) 主憐めよ

輔祭 此の日の純全・成聖・平安・無罪ならんことを主に求む、 (詠) 主賜へよ

輔祭 平安の神使正しき教導師、吾が靈体の守護者を賜はんことを主に求む

輔祭 我等の罪と過とを宥め赦さんことを主に求む、

輔祭 我等の靈に善にして益ある事、及び世界に平安を賜はんことを主に求む

輔祭 我等の生命の餘日を平安と痛悔とを以て終らんことを主に求む

輔祭 我等の生命の終が「ハリストティアニン」に適ひ、疾なく、耻なく、平安なること、及びハリストスの畏る可き審判に於て宜しき対をなすを賜はんことを求む

輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等己の身及び互に各の身を以て、并に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、

(詠) 主爾に

司祭 (高声) 蓋爾は仁慈と慈憐と仁愛との神なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世々に、

(詠) 「アミン」

司祭 衆人に平安、 (詠) 爾の神にも

輔祭 我等の首を主に屈めん、 (詠) 主爾に

司祭 (祝文を黙誦)、聖なる主、高きに居り卑きを臨み、爾が見ざる所なき目にて萬物を鑑る者や、我等心と体との項(くび)を爾の前に屈めて爾に禱る、爾が見えざる手を爾が聖なる住所より伸べて、我等衆人に福を降し給へ、我等に自由或は自由ならずして犯し罪あらば、爾善にして人を愛する神なるに依りて之を赦して、我等に今世来世の諸善を與へ給へ、

(高声) 蓋我が神や、我等を憐みて救ふこと爾に帰す、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世々に、

(詠) 「アミン」

輔祭 睿智 (詠) 福を降せ

司祭 永在の主ハリストス我等の神は恒に崇め讚めらる、今も何時も世々に

(詠) 「アミン」

神や、我が国の天皇と、正教会の教と、正教のすべてのハリストティアニン等を永く守り給へ、

司祭 至聖なる生神女や、我等を救ひ給へ、

(詠) ヘルビムより尊くセラフィムに並びなく榮え、貞操をやぶらずして神ことばを産みし実の生神女たる爾を崇め讚む、

司祭 ハリストス神我等の恃や、光榮は爾に帰す、光榮は爾に帰す、

(詠) 光榮は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々に「アミン」、主憐めよ(3次) 福を降せ、

司祭 (発放詞) _____ハリストス我等の眞の神は、其至浄なる母、光榮にして讚美たる聖使徒聖某(本日聖人の名を挙ぐ)及び諸聖人の祈禱に因りて我等を憐み救はん、彼は善にして人を愛する主なればなり、

(詠) 「アミン」

【萬壽詞】

神よ、我が国の天皇を、及び国を司る者、我等の(府)主教 _____
及び悉くの正教のハリストティアニン等を 幾とせにも護り給え。

一時課

きた われら おう かみ こうはい
來れ、我等の王・神に叩拜せん。

きた われら おう かみ こうはい ふふく
來れ、ハリストス我等の王・神に叩拜俯伏せん。

きた われら おう かみ まえ こうはい ふふく
來れ、ハリストス我等の王と神の前に叩拜俯伏せん。

第5聖詠

しゅ わ ことば き わ おもい さと わ おうわ かみ わ よ こえ き い たま われなんじ いの
主よ、我が言を聴き、我が思を悟れ。我が王我が神よ、我が呼ぶ聲を聴き納れ給へ、我爾に祈れ
ばなり。主よ、晨に我が聲を聴き給へ、我晨に爾の前に立ちて待たん。蓋爾は不法を喜ばざ
る神なり、悪人は爾に居るを得ず、不虔の者は爾が目の前に止まらざらん、爾は凡そ不法を行
ふ者を憎む、爾は 謊を言ふ者を滅さん、残忍詭譎の者は主之を惡む。惟我爾が 憐の多きに倚
りて爾の家に入り、爾を畏れて爾が聖堂に伏拜せん。主よ、我が敵の爲に我を爾の義に導き、
我が前に爾の道を平にせよ。蓋彼等の口には眞實なく、彼等の心は惡逆、彼等の喉は開け
たる 柩、其舌にて媚び諂ふ。神よ、彼等の罪を定め、彼等をして其 謀を以て自ら敗れしめ、
彼等が不虔の 甚しきに依りて之を逐い給へ、彼等爾に逆らえばなり。凡そ爾を頼む者は喜び
て永く 樂み、爾は彼等を庇ひ護らん、爾の名を愛する者は爾を以て自ら詔らんとす。蓋主よ、
爾は義人に福を降し、 恵を以て盾の如く彼を環らし衛ればなり。

第89聖詠

しゅ なんじ よよ われら かくれが やまいま しょう なんじいま ち ぜん せかい つく さき かつよ
主よ、爾は世に我等の避所たり。山未だ生ぜず、爾未だ地と全世界とを造らざる先、且世よ
り世までも爾は神なり。爾人を塵に歸らしめて曰う、人の子よ、歸れと。蓋爾が目の前には、
せんねん す さくじつ ごと やかん こう ごと なんじ おおみず ごと かわら なが かわら ゆめ ごと あさ お
千年は過ぎし昨日の如く、夜間の更の如し。爾は大水の如く彼等を流す、彼等は夢の如く、朝に生
ふる草の如し、朝には花さきて且青し、暮には刈られて稿る。蓋我等は爾の怒に因りて消え、爾
の 憤に因りて惶れ惑ふ。爾は我等の不法を爾の前に置き、我等の隠れたる事を爾が 顔の光
の前に置けり。我等が 悉くの日は爾が怒の中に過ぎ、我等は我が年を失ふこと音の如し。我が
とし かつ しちじゅうねん あるい すこやか はちじゅうねん そのあいだ さかん とき ころう やまい けだしその す
年の數は七十年、或は 健なれば八十年なり、其間の 壯なる時も、劬勞と疾病あり、蓋其過
ぐる こと 速にして、我等飛び去る。誰か爾が怒の力を知り、又爾を畏るる度に依りて爾の
いきどおり し ねが われら わ ひ かぞ おし ちえ ころう え たま しゅ おもて
憤を識らん。願はくは我等に我が日を算ふることを教へて、智慧の心を獲しめ給へ。主よ、面
かえ いずれ とき いた なんじ ぼく あわれ たま つと なんじ あわれみ もつ われら あ しか
を回せ、何の時に至るか、爾の僕を憐み給へ。夙に爾の 憐を以て我等に飽かしめよ、然せば
われら しょうがいよろこ たの なんじ われら ウ ひ われら わざわい あ とし か われら たの
我等生涯 歡び樂しまん。爾我等を撲ちし日、我等が 禍に遭ひし年に代えて、我等を樂しまし

め給へ。願はくは爾の工作は爾の諸僕に著れ、爾の光榮は其諸子に著れん、願はくは主吾が神の恵は我等に在らん、願はくは我が手の工作を我等に助け給へ、我が手の工作を助け給へ。

第100 聖詠

我 憐 と審判とを歌はん、主よ、爾に歌を奉らん。我玷なき道を思はん、爾 何の時我に至るか、我玷なき心を以て我が家の中を行かん。我が目の前には邪なる物を置かざらん、法に背く行は我之を疾む、其れ必我に附かざらん。壊れし心は我に遠ざかり、悪しき者は我之を識らざらん。隠に己の隣を誘る者は我之を逐ひ、目傲り、心高ぶる者は我之を容れざらん。我が目は斯の地の忠信なる者を顧みて、彼等を我が傍に居らしめん、玷なき道を行く者は我に事えん。貳心を行ふ者は我が家に居るを得ず、謊を言ふ者は我が目の前に止まらざらん。晨に我此の地の悉くの不虔者を滅して、凡そ不法を行ふ者を主の城邑より絶たれしめん。光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、「アミン」。

「ア ril イヤ」「ア ril イヤ」「ア ril イヤ」、神よ、光榮は爾に歸す。三次

主 憐 めよ。三次

主 憐 めよ。(3次)

光榮は父と子と聖神^oに歸す。

トロパリ (その週の調のトロパリ)

誦經 今も何時も世々に、「アミン」。

嗚呼 恩寵に満たさるる者よ、我等何を以て爾を稱せんか、天とせん、爾義の日を照したればなり、樂園とせん、爾枯れざる花を開きたればなり、童貞女とせん、爾貞操を壊らざればなり、淨き母とせん、爾聖なる懐に萬物の神たる子を抱きたればなり、彼に我等の靈の救はれんことを祈り給へ。

我が足を爾の言に固め給へ、諸の不法の我を制すを許す母れ。

我を人の迫害より救ひ給へ、然せば我爾の命を守らん。

爾が顔の光にて爾の僕を照し、爾の律を我に誨へ給へ。

主よ、願くは我が口は讚美に満てられて、我爾の光榮を歌ひ、日々に爾の威嚴を歌はん。

[聖三祝文][至聖三者][天主經]

誦經 聖なる神、聖なる勇毅、聖なる常生の者よ、我等を憐めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、「アミン」。

至聖三者よ、我等を憐め、主よ、我等の罪を潔くせよ、主宰よ、我等の愆を赦せ、聖なる者よ、臨みて我等の病を癒し給へ、悉く爾の名に因る。

主 憐 めよ。三次

光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世々に、「アミン」。

天に在す我等の父よ、願はくは爾の名は聖とせられ、爾の國は來り、爾の旨は天に行はるるが

ごと ち おこな わ にちよう かに こんにち われら あた たま われら おいめ もの われら ゆる ごと
如く地にも行はれん、我が日用の糧を今日我等に與へ給へ、我等に債ある者を我等免すが如く、
われら おいめ ゆる たま われら いぎない みちび なお われら きょうあく すく たま
我等の債を免し給へ、我等を誘に導かず、猶我等を凶悪より救ひ給へ。

司祭 けだしくに けんのう こうえい なんじちち こ せいしん き いま いつ よよ
蓋國と權能と光榮は爾父と子と聖神に歸す、今も何時も世に。
誦經 「アミン」。

コンダク (その週の調のコンダク)

しゅあわれ
主 憐めよ。十二次

いづれ ひいづれ とき てん ち こうはいきんえい かんにん こうじ しぜん ぎじん あい ざいにん
何の日何の時にも、天にも地にも叩拜讚榮せられ、寛忍、鴻慈、至善にして、義人を愛し、罪人
あわれ らいせい ふく やく よるず もの すくい まね かみ なんじしゅ みづか わ こ とき いのち
を憐み、來世の福を約して、萬の者を救に招くハリストス神よ、爾主よ、親ら我が此の時の禱
う われら いのち なんじ いましめ むか たま われら たましい せい からだ いさぎよ おもんばかり
をも受け、我等の生命を爾の誠に向はしめ給へ、我等の靈を聖にし、體を潔くし、慮
なお おもい きよ われら ことごと うれい わざわい やまい すく なんじ せい てんし もつ われら
を直くし、思を淨くし、我等を悉くの憂と禍と疾より救ひ、爾の聖なる天使を以て我等を
めぐ われら そのかこみ まも みちび しん いつ なんじ ちか がた こうえい さと いた たま けだし
環り、我等が其圍に衛り導かれて、信の一なると爾の近づき難き光榮を悟るに至らせ給へ、蓋
なんじ よよ あが ほ
爾は世に崇め讃めらる、「アミン」。

しゅあわれ
主 憐めよ。三次

こうえい ちち こ せいしん き いま いつ よよ
光榮は父と子と聖神に歸す、今も何時も世に、「アミン」。

ヘルウィムより とうと ならび さか みさお やぶ かみことば う じつ しょうしんじよ
尊く、セラフィムに並なく榮え、貞操を壊らずして神言を生みし實の生神女た
なんじ あが ほ
る爾を崇め讃む。

しんぶ しゅ な もつ ふく くだ
神父よ、主の名を以て福を降せ。

司祭 かみ われら おん こうむ われら ふく くだ なんじ かんばせ もつ われら たら ならび われら あわれ
神よ、我等に恩を被らし、我等に福を降し、爾が顔を以て我等を照し、並に我等を憐
たま
み給へ。

誦經 「アミン」。

【生神女のコンダク】

生神女やわれらなんじのぼくひはわざわい
 よりたすけられしをもってなんじよくかつの
 将_{シヨウ}すいに勝ち歌と感謝をたてまつる勝たれぬ
 ちからをたもつによつてわれらをもろもろの
 苦難_{クナン}よりすくいなんじをうとてよめならぬ
 よめやよろこべよと呼ばしめたまえ

司祭 ハリストス神我等の恃よ、光栄は爾に帰す、光栄は爾に帰す。

(詠) 光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世世に、「アミン」主憐めよ (3次)、福を降せ。

司祭【發放詞】ハリストス我等の眞の神は、其至浄なる母の祈祷と、無形なる尊き天軍、光栄にして讚美たる聖使徒、聖(某)本堂及び本日聖人、聖にして義なる神の祖父母イオアキム及びアンナ、及び諸聖人の轉達に因りて、我等を憐み救はん、彼は善にして人を愛する主なればなり。

(詠) 「アミン」

適宜

【聖堂のトロパリ】【祭のトロパリ】【聖人のトロパリ】

日本の聖ニコライのトロパリ

使徒と等しく同座なる者、忠実にして神智なるハリストスの役者、
 聖なる神に選ばれたる笛、ハリストスの愛に満ちたる器、

我が国の光照者 亜使徒 (大) 主教聖ニコライよ、爾の牧群のため、及び全世界のために、生命を賜う(保つ)聖三者に祈り給え。